

今号のピックアップ

1～3ページ 第57回全国公立小中学校事務研究大会(滋賀大会)報告

4ページ 第42回政令指定都市学校事務職員研究協議会報告・役員コラム



第57回全国公立小中学校事務研究大会(滋賀大会)

「学びの環境を創造する学校事務」

～三方よしで 学校まるごと ウェルビーイング～

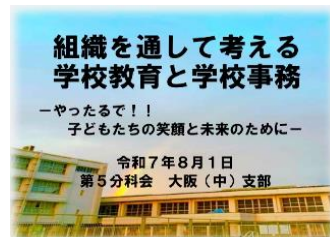
日時:令和7年7月31日(木)～8月1日(金)

会場:滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、ピアザ淡海 ピアザホール

第57回全国公立小中学校事務研究大会(滋賀大会)分科会報告

<研究発表>

私たち市事研が担当した第5分科会では、「組織を通して考える学校教育と学校事務－やったるで！子どもたちの笑顔と未来のために－」と題し、学びの環境整備に向けて学校事務職員が「学校財務運営」において果たすべき役割と、それを広げていくための学校事務職員による「組織的な学校経営への参画」と「人材の育成」について、これまで市事研が継続的に進めてきた研究内容を基に提案しました。



<グループワーク>

学校事務職員の「人材の育成」をテーマとし、ワークシートに沿ってグループワークを行いました。まず、グループワーク1では「自己啓発・スキルアップのために意識していること、取り組んでいること」、グループワーク2では「所属する地域で、新規採用者や次世代のリーダー育成のためにどのような人材育成が図られているか」について、各グループで意見交換を行いました。グループワーク3では「今後学校事務職員はどのようにして組織的な人材育成を図っていくべきだと考えるか」をテーマに話し合っていたいただき、各グループで回答を入力後、三つのグループに代表して発表していただきました。

【代表グループの発表内容】

- ・研修に積極的に参加するなど、ロールモデルとなる人に出会えるような機会を増やすことで、仕事のモチベーションにつながり、魅力のある仕事だと気づくことができる。また、研修講師を経験することで、知識やスキルを身につけるだけでなく若い人から気づきをもたらえるなど、良い経験につながる。
- ・共同学校事務室や学校内での指導助言など、それぞれの役割に基づいた育成方法で、教えやすく、聞きやすい環境づくりをめざすべきだと思う。また、理想の学校事務職員像として、なんでもやってくれる便利屋ではなく、根拠を基に正しい判断ができ、そのうえで頼られる、信頼してもらえるような学校事務職員をめざしたいと思う。
- ・組織的な人材育成をしていくべきだと考えるが、定数の問題もあり難しい。若手にとっては人材育成指標(何年目までにどこまでのスキルを身につけておくべきか)が必要である。また、最新のもの(T e a m s等)を活用するなかで、原始的な方法についても若手にうまく伝えていく必要がある。

その他のグループでも自分自身が置かれている状況を伝え、他都市の状況を聞きつつ、理想とする人材育成やその手法等について活発な意見交流が行われていました。

<講師講評>

茨城大学 教育学部 教授 加藤 崇英 様 に、研究発表とグループワークの講評及び共同学校事務室とこれからの学校事務について、また、グループワークのテーマ「人材の育成」にかかる力量形成やリーダーの役割などについてもお話しいただきました。



まず、社会から学校教育が何を期待されているのかということから、学校の組織を支える学校事務の動向を確認するうえで、次期学習指導要領や教育政策のお話をいただき、学びの多様化・個別化が進むなか、学校教育の最大の課題「何をもちて学びと認めるのか」や「学びをどう保障するのか」などのお話がありました。また、ますます便利な社会になっていくうえで、私たちが経験として積み重ねていることは、次の世代にとっては「学習内容（学ぶべき内容）」となり、だれかが整理して伝える必要がある。現在はそこにD XやI C Tが入り、経験を伝えるだけでなく、効率的に活用して教える力が求められており、こうした視点をもたなければ、人材育成は成り立たないとおっしゃっていました。今回市事研が行った、二次元コードを活用したグループワークの方法一つをとっても、紙からデジタルへと変化してきたように、教育や学校の仕事もD Xによって大きく変わりつつある。仕組みは同じでも方法は進化しており、それに対応していくことが教員や学校事務職員に求められているということでした。



続いてグループワークについては、発表内容（1ページ【代表グループの発表内容】参照）に対してそれぞれ次のご講評いただきました。

- ・ロールモデルを見ることは基礎的スキルや意思決定の学びにとって重要であるが、仕組みや環境が変わると実務のやり方は変わるため、何をどのように学ぶかを意識し、単に見ただけで理解したつもりにならない工夫が必要である。
- ・根拠に基づいて判断する力は重要であるが、制度の変化や改正の経緯を理解していなければ、適切に判断・説明することは難しくなる。
- ・育成計画は上から下だけでなく、現状の組織やメンバーから逆算してスキル習得や学びを組み込む「下からの視点」も重要で、アナログ・デジタルの変化と同様に、ミクロ・マクロの視点で考えることが求められる。

共同学校事務室については、大阪市の場合、組織を整備したうえで人材育成の方針を組み込み、必要なスキルを計画的に育てることが運営の鍵となっていることや、「校園ネットワークシステム」などのシステムが集中管理されていることなど、全国的に見ても進んでいると述べられました。また、新潟市や宇都宮市など、他都市の共同学校事務室の事例についてもお話しいただきました。

最後に人材育成について、学校事務職員の力量形成は、まずテクニカルスキル（基礎的事務処理）、次



にヒューマンスキル（協力・リーダーシップ）、さらにコンセプチュアルスキル（全体を見渡す力）の段階で進められ、共同学校事務室の運営ではヒューマンスキルが特に重要であり、学校長や教育委員会と対等に協働できる人材の育成が制度維持の鍵となる。また、中堅職員（ミドルリーダー）は、単なるテクニカルスキルだけでなく、ストーリーイメージをもつことが非常に重要であり、若手をミドルに引きあげていく際に、この役割を任せることが人材育成の大きなポイントになると述べられました。

～アンケート～

- ・発表→グループワーク→講演ととても充実した内容でした。グループワークでは、大阪市だけでなく、他都市のお話も伺えたのはとても良かったです。
- ・研究発表のなかでもあったように、少子化や業務の多様化が進んでいるため、ますます「組織的な」取組が重要になることを痛感しました。ご助言いただいた加藤先生のお話も、近年の教育政策から学校事務職員の職能形成まで、とてもためになる講話でした。
- ・共同学校事務室が実際にどのように機能しているか、他校への兼務発令があることのメリットを知ることができました。また、そこからの課題が組織や人材育成に帰結するのが、一つの学びになりました。



第 57 回全国公立小中学校事務研究大会(滋賀大会)報告

1 日目の午前では開会式のあと、文部科学省による行政説明及び全事研による活動報告が行われました。

午後からの全体研究会Ⅰでは、「学びの環境を創造する学校事務ー未来の創り手をはぐくむ財務マネジメントー」をテーマに、全事研本部より学びの環境整備について、ファシリティの観点から学校事務の機能や学校事務職員の力量形成のあり方を追求し、その方向性を示す三つの提案発表が行われました。



提案Ⅰでは、「地域とともにある学校の学びの在り方・未来の創り手をはぐくむ学びの環境」について、学校のマネジメント空間を拡張し、財務マネジメントによって多様な主体とともに学びの環境を創造することで未来の創り手をはぐくむことができるという仮説の提案がありました。

提案Ⅱでは、「学びの環境を創造する事務機能と事務職員の役割」について、クラウドファンディングを使った学校図書館の創造を例に、資源の獲得や予算委員会の運用、地域とのつながり、共同学校事務室で経営資源を管理・活用するといった多様な主体との合意形成による、提案Ⅰの実現にかかる提案がありました。

最後の提案Ⅲでは、提案Ⅰ・Ⅱの実現に必要な「学びの環境を創造する事務職員の力量形成」について、自ら学び続ける姿勢や力量形成を支える仕組み、キャリア形成について、学びの可視化をすることで専門性を高めることができるという提案がありました。

これら三つの提案により、事務職員が学校のマネジメント空間を広げることで、未来の創り手をはぐくむ学びの環境を創造できるのではないか、と締めくくり研究発表を終えました。



それぞれの提案内容に対する助言者からの講評として、提案Ⅰについては学校のマネジメント空間をもっと広く柔軟に考え、固定観念を疑ってほしいということ、提案Ⅱ・Ⅲについては自身の経験を基に、予算委員会の重要性や日常的なコミュニケーションのなかでの情報収集力が大切であるということが述べられました。最後に、今後の学校事務職員のキャリア形成を考え、研修の充実・育成指標のその先を考えていくことの重要性が示されました。

第 42 回政令指定都市学校事務職員研究協議会報告

令和 7 年 8 月 7 日（木）～ 8 日（金）相模原市立小山小学校において、第 42 回政令指定都市学校事務職員研究協議会が開催されました。

はじめに、新潟市から第 41 回研究協議会の報告が行われ、全体会 I では、各政令市から事前に提出された実態調査を基に、学校事務職員を取り巻く情勢や事務領域の諸課題、先進事例等の取組の報告を行い、その後、各分科会に分かれて研究協議を行いました。

第 1 分科会（本部）では「政令指定都市の学校事務職員の現状と今後について」として、学校事務領域における諸課題の整理と今後の事務研究会の組織運営について、共同学校事務室の設置・運営状況など、新たな学校事務の展望に向けて事務研究会としての取組について協議、意見交換を行いました。

第 2 分科会（研究）では「研究活動の継続」として、政令市における学校事務研究のあり方について、中長期的な研究計画の策定や研究の実質化について協議を行いました。

第 3 分科会（研修）では「スキルアップにつながる研修」として、各政令市で実施した研修の実施報告や、研究会における研修会のあり方、学校事務職員の人材育成について協議を行いました。

三つの分科会に加えて今回は、『研究からの実践』の実現例にみる段階的課題解決ワークショップも行われました。研究会の「役員」としての課題等を共有し、解決策について協議しました。

2 日目の全体会では、各分科会とワークショップで協議した内容の報告や、熊本市で開催予定の令和 8 年度研究協議会の案内が行われました。

役員コラム「挑戦し続ける学校事務職員をめざして」

「挑戦」というキーワードで思い浮かべる有名人はだれですか？私は現メジャーリーガーの大谷翔平選手（以下、大谷選手）が思い浮かびます。

高校生時代の大谷選手の夢（目標）は「8 球団からドラフト 1 位で指名を受ける」でした。この壮大な目標を達成するために、大谷選手は「体づくり」「メンタル」「人間性」など、目標を達成するための要素を八つに分解し、更にやるべきことを具体的に 64 個書き出しました。この際に使われた方法がマンドラチャートです。

マンドラチャートとは、9×9 のマス目からなる、思考・発想のためのフレームワークの一つです。要素を漏れなく洗い出し、整理し、行動を具現化することができるというメリットがあります。特に目標達成のためのツールとして利用されることが多いようです。

私たち学校事務職員も目標を設定し、達成に向けて行動、挑戦し続けることが大切です。是非、会員の皆様も「子どもたちの笑顔のために」自身ができることを考えるきっかけとして、マンドラチャートを活用してみてもいかがでしょうか？

大谷選手 マンドラチャート



編集後記

全事研大会で他の自治体の学校事務職員の方々と交流しました。自治体ごとに予算や組織体制、仕組みが違っており、そのなかでも「今自分ができること」を探求されていて、私ももっと子どもたちのために何ができるのかなと考える良い機会になりました。全国の学校事務職員の皆さんが、風に揺れてキラキラ輝く琵琶湖の水面のように輝いて見えました🌊 (S)